

平成27年度

**あいち多文化共生作文
コンクール入賞作品集**

【優秀賞（小学生の部）】

豊橋市立岩西小学校 三年 藤下 莉渚
「みんな友だち」 一頁

【優秀賞（中学生の部）】

犬山市立東部中学校 二年 舟橋 龍観
「外国人を通して考えたこと」 二頁

【佳作】

豊橋市立岩田小学校 五年 池上 ふらの
「私は『外国人の子のお世話役』」 四頁

豊田市立保見中学校 三年 前田 莉子
「私の隣の多文化共生」 六頁

豊橋市立東部中学校 三年 平松 里彩
「多文化共生社会をつくるには」 八頁

豊橋市立南部中学校 三年 仲川 晴斐
「生活に潜む外国人への差別」 十頁

豊橋市立高豊中学校 二年 鈴木 陸斗
「外国へ行き、僕が感じたこと」 十二頁

「みんな友だち」

私はあいちけんとははし市に住んでいます。私が通っている小学校には、たくさんの外国人やハーフの人がいます。

私のクラスには一人、学年には六人います。ブラジルやペルー、フィリピンなど、いろいろな国から来たお友だちです。学校には国さいクラスというクラスがあつて、日本語があまりとくいではない人が算数と国語を、私たちとはべつでべん強しています。学校で、ブラジルの料理やおかしをみんなで食べることもあります。

とははし市には他にもたくさんの外国人が住んでいます。とくにブラジルから来た人が多いです。なので、お店屋さんや公園のトイレなどには日本語、英語、ポルトガル語であん内が書いてあります。

前にテレビで、白人が黒人をなぐったり鉄ぼうをうったりしているのを見ました。せんそうをしているようすを見たこともあります。お母さんが、「人しゅさべつで、こういうことがおこることがあるんだよ。」

と言っていました。人しゅさべつというのは、人間を、人しゅやみんぞく、国などで区べつし、いやがらせやいじめをすることだとじ書に書いてありました。

私の学校では日本人も外国人もみんな関係なく仲良く生活しています。なので、どうしてテレビで見たようなことがおこるのか分かりません。かみの毛や目やはだの色は一人一人ちがうし、ちがうのが当たり前だと私は思います。

私のお友だちの外国人は、一生けん命日本語をおぼえようとがんばっています。サッカーが上手な子や、走るのがはやい子やなわとびをがんばっている子など、すごいなと思う子がたくさんいます。みんなやさしくて明るくて元気いっぱいです。私たち日本人とかわりません。

だから、日本人だとか、外国人だとか分けずにみんな仲良くすればいいと思います。さべつと区べつはちがう、とお母さんが言っていました。だからお手伝いがひつような時はたすけ合えばいいけど、そうではない時はみんな一緒にいいと思います。

もし自分が外国に行った時に日本人だからといっていじめられたり、いやなことをされたりしたら、すごくいやだしかなしいです。自分がされていやなことは他の人にしない方がいいと思います。

日本人のお友だちも、外国人のお友だちも、みんな同じ「お友だち」です。みんな大切な「仲間」です。

「外国人を通して考えたこと」

僕には、フィリピン人の知人がいる。僕の姉の大学の友達で、去年、知り合った。僕が親しく話す外国人というのは、その人が初めてだ。その人のことを話す前に、少し、僕の姉について話したい。姉は小学校一年のとき、アメリカに行き、日本人とはまた違う外国人の親しみやすさに触れ、四年生のときには、一人でホームステイにまで行ってしまった程だ。だから、誰とでもすぐ仲良くなり、友達も多い。そんな姉を通じて、フィリピン人の人と出会った。その人は、中学二年で初めて日本に来たそう。日本に来た時は、日本語は全く話せなかったそう。もともと、母国では、タガログ語と英語を話していたらしい。だから、日本の学校の授業で、先生の話す日本語と、友達と遊ぶ中で話される日本語のシャワーをあびながら、少しずつ、日本語を理解していったようだ。学校には、他にも、外国人がいたが、英語を話す友達はおらず、学校からの親への連絡も英語でサポートしてくれる人が少なく、大変苦労したと聞いている。期限付きのホームステイならまだよいが、毎日、言葉も理解できない中で生活していくということとは、いくら、周りが親切にしてくれるといっても、不安や孤独な気持ちを多く味わったのではないか。それでも、生活はしていかなくてはならないので、まず、相手の言葉を理解するように努め、何とか自分の思いも伝えようとしたに違いない。そんな中で、高校へも進学した。そしてそこから、さらに大変だったらしい。生活するのに必要な言葉だけでなく、その言葉を通して大学受験に必要な勉強をしていかななくてはならなかった。しかし、ここでも、高校の先生がつきつきりで面倒を見てくれたそう。そして、国公立大学や有名私立大学にも合格したというのだから、並大抵の努力ではなかったはずだ。

僕は、その知人を本当に素晴らしいと思う。何かを学ぶ謙虚さと努力をしてきたという自信が感じられるからだ。しかし、こうした生活が成り立ってきたのは、本人の努力があつてのことだが、それに応えようとした多くの人の支えがあつたのも事実だろう。

人は一人では生きられない。みんなの中で生かされ、お互いを支え合うことが大切である。外国人ならなおさら、言葉や生活の違いを埋められるように、多くの人が支えなければならぬ。

学校では、普通学級で学ぶと同時に、特別支援学級でも、普通学級で理解できなかったことや日本語が学べるような機会が必要なはずだ。また、普通、日本の家庭では、宿題を親に見てもらふことができるだろうが、親

が外国人であれば、それは難しい。そうであるなら、地域で、放課後、そういった子たちの勉強を見てあげられる場所も必要だろう。とにかく、一日でも早く、学校で、安心して学べるように、そんなサポートが必要なのである。そうしているうちに、言葉だけでなく、生活面でも学んでいくことができ、人との交流を通して、精神的にも、より安定が図れるだろう。また、生活面でも、サポートが必要なはずだ。ちなみに、その知人は、今では流ちょうに日本語が話せるので、問題はないが、日本語を話せない母親の代わりに、市役所へ行って、いろいろな手続きをするそうだ。日本語を話せない人が、安心して暮らせるように、公的なサポートも充実させなければならぬだろう。また、公的なサポートだけでなく、地域のボランティアの人を中心として、国際交流をしようと、もっと外国人を身近に感じて、ただ、こちらから何かを教えるだけでなく、外国の言葉や習慣を教えてもらう機会も得ることができよう。僕も英語だけに限らず、知らない外国語や外国の人の生活をテレビなどで見るととても興味深く思う。それを現実に見たり、聞いたりできれば、心の壁もなくなり、知る喜びを味わえると思う。知れば、相手にもこちらのことを知ってほしいと思い、どうすればもっと知ってもらえるかを考える。もっと深く相手のことを考えることで、外国人であること、日本人であることの壁をこえて、同じ人として生きられるようになったらいい。そして、外国人だということ、生きにくさを感じるのではなく、自分の生きる道を自由に選択できるようになってほしい。そういう生き方を外国人がしていたら、僕たち日本人も、もっと広い視野に立って生きる方法を外国人から学ぶことができるかもしれない。

姉とその友達を見て、僕は思う。外国人に対して、一方的に教えたり、支えたりするのではないと。必ず教えられることもあり、人として影響しあうのだ。お互い知っている方法を分かち合うことで、考え方も広がり、お互いを認め合って生活できるのだ。そして、外国人であっても、堂々と生きていける社会を築いていけるのだと僕は考える。僕もその一員として自覚したいと思う。

「私は『外国の子のお世話役』」

豊橋市は、とても外国人の多い市です。その中の、私は岩田小学校に通っています。全校の人数は約七五〇人ですが、その中の約一〇〇人が外国の子たちです。ブラジル人とフィリピン人がほとんどです。今の私のクラスにも外国の子が七人います。

私が、外国の友達とよく遊ぶようになったのは、二年生のころからです。実は、私は友達作りがあまり得意ではありませんでした。しかし、二年生から始めたある事から、私は外国の子たちとよく遊ぶようになったのです。それは：英語を始めたことです。始めたばかりの時、英語は私にとつて、とても楽しいものとなりました。それからしばらくたって、もう少し英語が上達してくると、

「せっかく外国の子たちがたくさんいるんだから、話しかけてみれば？」とお母さんやお父さんに言われるようになりました。しかし、クラスにいる外国の子たちは、まだ日本の生活に慣れていないようで、話してくれるどころか、困っている様子でした。そこで私は

「これは私の出番が来たな。」

と思ったのです。そして私は、話しかけました。まだ全然文章になっていない、カタカタの英語で。最初は、意味も何をしに来たのかもきつと分かっていていかなかったと思います。でも、時間がたつにつれて、外国の子が私の英語を分かってくれる力が上がっていったため、教えてあげるために話しかけるのではなく、本当にふつうの友達のように話しかけるようになっていきました。そして、次第に私の周りには、たくさん外国の子が集まってくるようになりました。さらに、

「ねえ、この日本語、英語でどういうふうに言うの？」

と日本の子たちも集まってくるようになりました。そうして、私のカタカタ英語も、友達作りが苦手という気持ちも消えていきました。

二年生でこのことがあってから、私は新しく入ってきた外国の子たちに積極的に話しかけたり、助けてあげたりできるようになりました。そして私は、『外国の子のお世話役』になりました。これは今もずっと続けていて、この先もずっと続けていこうと思っています。

実は、『外国の子のお世話役』は一人じゃなかったのです。誰かというところ、私の妹です。つまり、私たちは姉妹そろって外国の子と仲良くしている、ということなのです。しかし妹は、私のように英語を習っていません。どうやったのでしょうか。妹は、誰とでも話すことが大好きです。その性格から、

外国の子たちにたよられるようになったと思います。それで妹も、手助けするようになりました。

「見本を見せながらやらないと分かってくれなかったから、一回一回大変だったよ。」

と妹は話していました。でも、たくさんの友達ができて、楽しい仕事です。やりがいがあります。

私と、外国の子とを結んだのは、英語でした。英語に感謝です。これからも英語を続けていきたいです。

せっかく外国の人の多い豊橋市に生まれてきたので、これからも外国の人々と仲良くしたいです。それから、外国の人々が今よりもっと住みやすい市にできるように協力していきたいです。そして、授業で習った、『多文化共生』を大切にしていきたいと思っています。

【佳作】 豊田市立保見中学校 三年 前田 莉子

「私の隣の多文化共生」

「この漢字なんて読むの？」

その子はいつもそんなふうに尋ねてきます。

「それはすいりよう（推量）と読むんだよ。」

と、私が答えるとその子は、

「ありがとう。」

と、笑顔で言ってくれました。

私の隣の席の女の子は外国人です。その子は今年に入ってから日本に来ました。日本語は話すことはできますが、難しい漢字を読むことや意味を理解することが苦手なようです。そんな彼女はよく私にわからない言葉を質問してきます。ある日、彼女は「潜在」という言葉の意味を私に聞きました。「潜在」という言葉は普段よく話したり耳にする言葉ですが、意味を説明するとなると日本にずっと住んでいる私ですが、上手く説明することができませんでした。しかし、彼女は私の話を一生懸命に聞き理解しようとしていました。そんな彼女と過ごしていくうちに、私は彼女の日本での勉強に必死についていこうとする姿、何より感謝の気持ちを大切にしている人としての優しさを知りました。私の中学校ではそんな気持ちを強く感じる時があります。

みなさんは、全校生徒の三分の一が外国人である学校がイメージできますか。私を通して保見中学校はまさにそんな学校です。一九八九年に日本の出入国管理法が改正し、豊田市内の自動車関連企業へと出稼ぎに来たブラジル人をはじめとした、多くの外国人が私の中学校区にある保見団地に移り住んで来ました。休み時間には日本語、ポルトガル語、スペイン語が飛び交い、様々な場面で文化や生活習慣の違いを感じることが出来ます。こうした環境にある保見中学校で私は三年間生活をしていて多文化共生について強く感じたことがあります。

まず初めに、私が普段接している外国人の子と、街中で見かける外国人とは全く雰囲気が違うということです。例えば、教室の中で一緒に話したり活動したりする外国人の子とは、何の違和感もなく他の日本人と同じように親しい友達として話すことができます。しかし、街中などで見る全く見ず知らずの外国人は、コミュニケーションを取る上でとても大きな壁があるように感じました。これは、長い間一緒に過ごしてきた時間やその人と会話を交わしたりした交流の深さの違いだと思います。

もう一つは、保見中学校では外国人生徒が多く通っているため、同じ言

葉や文化を持つ人達だけでコミュニケーションが取りやすくなっている環境があります。そのため、外国人生徒同士と日本人生徒同士で集まってグループを作ってしまった、日本人と外国人が交流をする機会が少なくなっている現状があるのも事実です。例えば、学校の授業の中でペアを作らなければいけない時、日本人は日本人と外国人は外国人とでペアを組んでしまいう傾向があります。もし、私が言葉も文化も違う海外で同じ状況になったなら、出身地である日本の人ばかりがいるグループに入りがちになり、現地の人との交流を避けてしまう気持ちになるのだらうと思います。しかし、こうしたことは多文化共生を推進するためには良いことではありません。

みなさんは、そもそもなぜ多文化共生を進める必要があると思いますか。それはお互いの文化の違いなどが招く誤解や争いが、相手の文化を理解し尊重し合うことによって減らすことにつながるからです。さらに、自分の知らない文化を知ることによって新たな発見や感動を得ることができません。私自身もブラジル人の友達と一緒に食事をしたりするとブラジル料理を食べることができ、ブラジルがどんな国であるか、今どんなものが流行しているのかなどを学ぶことができます。このようなことにより、私は多文化共生を進めていくことがとても大事だと思います。そのためには、見た目の違いや間違った先入観などの壁をなくし、お互いに歩みより理解し合う気持ちが大切だと思います。

はじめに紹介したブラジル人の彼女は、何事に対しても真剣な姿勢でどんな人にも優しく接することができる、とても魅力ある人物です。日本人である私は、言葉や文化の壁もなく恵まれた環境にいるにも関わらず、そんな状態に甘えている自分を情けなく感じ、生活面や勉強面でももっと努力しなければならぬと思うようになりました。

私は、知らない外国人と接することに対してまだ戸惑いがあること、そして保見中学校に外国人と日本人の間にある見えない壁を、彼女がしている努力と同じくらいの努力で解消していきたいと思います。それは、私と彼女が互いに様々なことを教え合い、学び合い尊重し合うことこそが多文化共生の第一歩であり、日々の学校生活で実践していくことで叶うと思います。私は多文化共生を体験しやすい環境にあることを、とても貴重で幸せなことだと思います。みなさんはそんな環境が身近にありますか。もし、自分の近くに外国人がいるなら少しでもその心の内を聞いてみてください。たとえ言葉や文化が違ってても、思いやりの心は世界共通だと思うから。

「多文化共生社会をつくるには」

私と多文化いや異文化との関わりは、過去に数回の家族とともに出かけた外国旅行が始まりでした。それは英語を話す国だったり、アジアの言葉話す国々だったりと言葉はわかりませんが、楽しい思い出ばかりでした。しかしそれは「共生」などという相互的なものではなく、観光という、現実から離れた作られた世界での一方的な体験であったからだと思います。知らされたのはつい最近のことでした。

私の周りには実は、小学生のころから現在までブラジル人の同級生が複数いました。私から見て彼らは残念ながらみんなと完全にうまく接しているとは言えない状態でした。これはただ彼らの性格や能力の問題なのかもしれません。しかし私は、私も含めた私たち周囲の者、日本人の外国人に対する理解や日本の外国人に対する環境の問題でもあると思います。外国旅行をしていた時の私は、みんな同じ人間なのだから当然分かり合える、言葉なんかいらぬ。食事だって、お土産だって何でも希望通りに手に入るとそう思っていました。お店の人も私の相手をしていて、にこにこしてみんな幸せそうだし、「共生」なんて簡単だと思っていました。しかし現実には異文化の人間同士がそんなに簡単に分かり合えるわけではありませんでした。世界では今でも紛争やテロが絶えず起こっています。

ある時、日本のレストランで父が父の友人のチュニジア人の男性に会わせてくれました。父と彼はフランス語で会話していたので私にはその内容はよくわかりませんでした。レストランで父が料理を注文するときにとても気を使っているのが気になって聞いてみると、「彼はイスラム教徒だから豚肉は食べられないのだよ。お父さんが気をつけてあげないと彼がづらい思いをするからね。」と言っていました。外国人と付き合うということはどうした食事のことまで理解していなければいけないのです。私はこのとき初めて言葉だけでなく文化、宗教までお互いを知り尽くして「共生」ということが成り立つのだと考えました。

多文化共生社会とは、国籍や民族などに関わらず、全ての人が互いの文化的背景などを理解し、ともに安心して暮らせ、活躍できる地域社会のことと書かれています。私は今本当にその通りだと感じています。私たちの県、愛知で今何ができるのか。私たちの県にはすでに多くの外国人が生活しています。街で見かける彼らは、日本語もあまり理解していなければ、公園などでルールを守らず勝手にバーベキューをしたりして社会的にも問題になっています。このように、彼らもまた日本で独自の社会を築き、日

本人と共生しようとはしていないように見えます。ではどうしたらお互いが分かり合えるようになるのか。私はそれは教育だと思えます。子供から大人まで、日本人にも外国人にも分け隔てなく「共生」のための教育を続けることです。具体的には、子供には日本人にも外国人にも義務教育で日本以外の外国の文化を今より積極的に教え、日本だけでなく世界でも通用するような文化的な知識を身に着けさせることです。また日本で暮らす大人には日本人だけでなく外国人にも「共生」に必要な生活の知恵みたいなものを考えます。例えば公共のバーベキュー施設をつくって今のルールでも彼らにも楽しむことができるよう工夫をしてあげるとかです。コスモポリタニズムという言葉があります。その言葉の意味は、世界市民主義とって個人を国家・民族を超えた世界の一員として位置づける世界観のことだそうです。愛知で育った世界中の文化を身に着けた子供たちが大人になった時、きっと私たちの愛知県も「共生」を可能にする世界市民主義の県になっていくと信じます。そのためには言葉を始め、世界中の多くの文化を広く学べるような学校をつくらなければいけません。大人になっても継続してお互いの文化を尊敬し、「共生」できるような社会の仕組みをつくることも必要です。私たちは自然に、世界中に多くの友人をつくり、国際交流もたくさんできるようになるでしょう。日本という小さな国の国民から世界の市民となるのです。そうすれば現在のようない紛争やテロなどがなくなる日がきっと来るでしょう。それをこの小さなわが町、愛知県から始めるのです。

「生活に潜む外国人への差別」

僕には部活動の柔道で知り合ったブラジル人の友だちがいます。彼は僕とは別の中学に通っていて柔道の合同練習で知り合いました。柔道の練習だけでなく、個人的な付き合いとして、お互いが切磋琢磨して柔道が強くなるようにと、昨年の夏には毎日のようにジムに通い、筋力トレーニングをして鍛えていました。ある時その友人が、

「あと6ヶ月でみんなとバイバイだな。」

と言い出しました。どうやらそれは彼がブラジルに帰ることを示唆しているようでした。僕はそれを聞いて驚き、今まで育んできた彼との友情がなくなってしまうのではないかと心配し、寂しくなつて叫びました。

「何でブラジルに帰るなんて言うんだ。ずっと日本にいればいいじゃないか！」

すると彼がこんなことを言ったのです。

「日本では外国人じゃダメとか外国人はそんなことをしてはいけないとか言われて嫌な思いをたくさんしてきたからな。嫌なニックネームで呼ばれ、どれだけばかにされてきたか君にはわからないだろう。それに俺は時々自分が一体どこの国の人間なのだろうと思うことがあるよ。だからブラジルに帰ることで何かが変わるような気がするんだよ。」

と言いました。しかし、彼は日本で生まれ、日本で育ち、日本語以外はしゃべることはできないのです。彼は現在、日本人の母親と二人暮らしの母子家庭です。だから中身は日本人と言っても過言じゃないと思うのですが……。僕との違いは、うらやましいほど精悍で彫りの深い顔立ちをしていて、一目見て日本人の顔立ちではないとわかります。名前もすべてカタカナで表記し、漢字は一文字もない名前です。住んだことがないのに「ブラジルへ帰りたい」と言うのは彼の体内にあるブラジル人の父親の遺伝子がそう言わせるのでしょうか。僕はもっと詳しいことを教えてもらおうとして彼が日本にいたことが嫌な理由を聞きました。彼が話してくれた内容は、僕の想像をはるかに超えた外国人に対する偏見とも言うべき日本人から受けた差別だったのです。

彼が幼い時に町内のお祭りに出かけた時のことでした。神社の境内に入ろうとした時、地元町内の祭りの役員をしている大人に、

「ここから先に入つてはいけません。」

と言われたそうです。彼の母がどうしてかと尋ねると、穢れるからだと言われたそうです。また神輿を担ごうとした時も、周りの大人から止められ

たそうです。その時、幼い彼には自分だけが止められた理由がわからなかったようですが、小学校に入り、何かと日本人には許されても見た目が日本人じゃない自分には許されない何かがあることがだんだんわかってきたそうです。僕は日本の伝統や風習、文化で外国人に対する差別があることを彼に聞かされて初めて知り、驚き、日本人の心の狭さに悲しくなりました。

ある日、同じ中学校の日系ブラジル人の友人が僕のそばに寄って来て愚痴をこぼしました。

「あいつ本当に腹立つなあ！」

「だったら本人に直接言わなくちゃね。」

その時、彼は衝撃的な言葉を発したのです。

「そりゃ、俺だって直接伝えたいよ。嫌なことは嫌だって……。でもそれが原因で喧嘩になって事件として扱われ、素行不良者という烙印を押されたら、将来日本の国籍を取る時に差し障ってくるかも知れないんだよ。だから国籍の取れる年齢の16歳になるまで俺は我慢して生きていくしかないんだよ。」

僕は彼の言葉を聞いてショックを受けました。今まで彼は優しくして穏やかな性格だと思っていたのですがそうではなく、かなり我慢をして耐えていたのです。幼い頃より両親に言い聞かされた約束で、日系ブラジル人として生まれた宿命でした。日本国籍を得るために色々我慢して耐えて、彼自身は今まで本当の想いを押し殺して生きてきたというのです。僕は彼の本心に気付けなかったことを悔しく残念に思いました。もし彼が我慢を知らず、感情に任せて相手とケンカになり警察沙汰になって日本国籍が取れなくなってしまう場合、日本語しか話せないのに両親や兄弟と無理やり別れさせられ遠い異国に強制的に追いやられてしまうことになるかもしれないのです。僕もそんな辛いことはないと思いました。

僕は彼らのことをきっかけに色々なことを知りました。日本人の外国人に対するひどい差別や偏見により多くの外国人が傷ついています。これからは彼らのような外国人や日系の人が安心して日本で暮らせるように彼らの国のことを理解し、また日本にいる外国人にも日本の文化を知ってもらい、お互いの国を深く理解してもらいたいです。そしていつか、日本から外国人に対する差別や偏見を取り払って、彼らに日本を「第二の故郷」と呼んでもらえるように多文化共生に努めていきたいと思えます。

「外国へ行き、僕が感じたこと」

アメリカ、ブラジル、中国、日本、韓国、エジプト：様々な国がある。もちろん、それらの国々には多くの国民が住んでいる。そんな当たり前前にことに気付いたのは、四年ほど前のことである。

僕は父の仕事の関係で、しばらくの間、ブラジルに住んでいたことがある。そこで僕は衝撃を受けた。その国には、実に様々な民族の人々が住んでいたからである。自分が住んでいた日本では、まず考えられないことだった。リベルダージという場所がある。日本人街と呼ばれている。日本食の店や、日本土産が置いてある店などが立ち並んでいた。日本の文化を歓迎しているように見えた。また、ゲイパレードと呼ばれるものがある。同性愛者たちが大通りで行うパレードだ。近所の人たちも一緒になつて騒ぐと参加する。日本ではまずあり得ないことだ。日本ではどちらかというといやらしいイメージをもたれやすい同性愛者たちが、多くの人々と一緒に騒いでいるのである。

ブラジルでは、他が他を、大勢が一人を認め合いながら生活している。アジア人だろうが、ヨーロッパ人だろうが、同性愛者だろうが、全て認める。認めてもつと知ろうとする。このことに僕は衝撃を受けた。その人を認めることと、その人の個性に関係なく接することは、似ているようで違う。前者は互いを知った上で理解することであり、後者は、独断と偏見によつて勝手にという響きを感じる。認めることが相槌を打つことならば、関係なく接することは、相手の顔を見ずに一人でしゃべり続けることである。その人の全てを包む。包んだ上で見つめることを、外国ではしている。

対して日本はどうだろう。僕の目から見ると、どうも自分たちと異なるものを排除しようとしているような気がする。大抵の人はそうではないだろうか。時々、「外国人だから」という言葉を耳にする。その言葉は彼等のことを理解した上で言っているのではないと思う。どうして当たり前が当たり前にできないのだろうか。全く分からない。ただこれは、日本では特別という話で、外国だって完璧というわけではない。ブラジルでは、僕らの家族に専属のドライバーの男性が一人、ついてくれた。彼は黒人だった。彼はこんなことを言っていた。

「肌が黒いからいいことがない」と。「いいこと」とはなんだろう。お金をもらうことだろうか。違う。彼の言う「いいこと」とは、僕たちの「当たり前前」である。肌が黒いだけで、僕たちと同じ生活が送れないのである。僕は、この状況に憤りを感じた。このことを考えるたびに思う。「人間の社

会って複雑だな」と。確かに、昔ほどのひどい差別は減ったかもしれない。ただ、今日において、このような差別と、様々な民族の人々が一緒に暮らしていくという多文化社会を築くべく努力することは、別問題ではないと僕は思う。

今も思い出す。まだ、ブラジルへ行って間もない頃、二人の少年に出会った。彼らは、慣れない英語で、僕や僕のいた国のことを色々質問した。「どこから来たの」、「ブラジルへ来てどれくらいなの」、「日本ってどんなところ」……。僕は答えた。慣れない英語で、知っている単語をつなげながら。僕はこの少年らの姿勢に感銘を受けた。すぐ近くに彼らの親もいて、こやかにこの様子を見守っていた。彼らは「僕」を知ろうとしてくれたのである。理解しようと思死になつてくれたのである。とてもうれしかった。

このとき、英語を得意にしようと思つた。
対して日本はどうだろう。外国人と聞けば色眼鏡で見えてしまっていないだろうか。日本へ帰ってきて、がっかりした。転入生が来たなら、その子を知り、仲間に入れるということ、小学校で教わらなかったのか。外国からの転入生に対する、誤解の発生源が分からなかった。対策が必要だと思う。ちよつとしたことでもいい。日本人の、外の世界を恐がってしまうという意識を変えられれば。

我々にできることはなにか。それは考えることである。一人一人が問題に向き合う。日本人たちは、他人任せにし過ぎてしまったのかもしれない。まず、自分が考える。そうして知り、理解する。そんな繰り返しをしながら一歩ずつ歩んでいけば、どんな国の人も笑顔で話し合える。そんな日が来るのではないだろうか。その日を思うと、胸が躍るばかりである。そして、この作文を読んでくれたあなたは、「考える」という大きな第一歩を、踏み出したことになるのである。